

「論理」を構築する論理

——横溝正史「本陣殺人事件」論

一 横溝テキストと〈戦後性〉および本稿の射程

横溝正史「本陣殺人事件」が発表されたのは一九四七年、探偵小説雑誌「寶石」の創刊号から八号にかけての誌上連載であった。江戸川乱歩に「これは戦後最初の推理長篇小説というだけではない、横溝君としても処女作以来はじめての純推理ものであり、又日本探偵小説界でも二三の例外的作品を除いて、殆ど最初の英米風論理的小説である」と評されたこのテキストが書籍化され単行本が実質的に流通したのは一九四八年に入ってからである。横溝は、本作の「あとがき」で次のように創作の意図を語っている。

即ち私にとっては終戦後の長篇第一作なのである。そしてまた、終戦後、出来るだけ論理的な本格探偵小説を書いていきたいと考える私にとっては、これは最初の試験的な作品であり、その意味でこの一作は、私にとって生涯忘れることのない小説となるであろう。

栗田卓

我々は、この二つの作品への評価に関していくつかの共通項を容易に析出できる。一つは、敗戦および占領下といった従来の価値観の変容を伴う時間軸を意味する用語である「戦後」という言葉の使用¹⁾〈戦後性〉をテキストが有しているということ、そして二つ目は「論理」という言葉で表象されている概念をテキストは主題としているということである。短絡の諷りを恐れずにこの二つを次のように接続してみたい。すなわち、「戦後」という同時代状況には「論理」が要請されているのだ、と。そして、そのように要請された「論理」は、「本陣殺人事件」で実現されていると乱歩は述べ、それは「日本探偵小説界」でも「殆ど最初の英米風論理的小説」であるとメルクマールにまで設定している。

以上のような状況に関して本稿は分析を試みるものであるが、先だって「本陣殺人事件」とはどのように位置づけられたテキストであるか、研究状況を確認しておこう。

「本陣殺人事件」の〈戦後性〉に関しては、事件の舞台となる「一柳家」の建築構造に関する小松史生子の次のような指摘が参

照で⁽³⁾きる。

領域は^{テリトリ}囲われる必要がある。その[、]囲いの顕在性で、自己の領域は隣接する他者のそれと区別され、定住生活の場が保たれるのである。バラックというやわな[、]囲いで[、]かろうじて自己領域を他者に向けて主張するほかない世相にあつて、まず関心を引くのは屋外の線引き^{エクスデリア}だつたはずである。また、激しい価値転倒のなか、政治不信にあつた国民感情としては、政府の公案よりも隣人同士の相互扶助のほうが確実な[、]生きる道[、]だつた。屋外の線引きは、したがつて隣人との接触面であり、閉じていると同時に開かれている家屋というものが、ここに心象リアリズムとして立ち現れる。

敗戦直後の焼け跡から「定住性」への情景と郷愁、同時にその裏返しでもある私秘性を「一柳家」の「堂々たる門がまえを誇る木造家屋」から読解する小松の論は、たしかに同時代状況の一面を捉えているだろう。その点では権田萬治が乱歩と横溝を比較し、前者の「子宮願望」⁽⁴⁾に対し、後者を「開かれた夜の田園風景」と評したことも、同系の分析といえる。

また、横溝正史テキスト全体に視野を広げてみれば、金田一耕助を「戦場体験を持つ生存者」と位置づける五味渕典嗣の「獄門島」論⁽⁵⁾、横溝テキストにおける「村落」表象を「変奏された都市文学」として分析する倉田容子の一連の論考もまた、〈戦後性〉という観点からテキストを読解する試みであるといえよう。

以上のように、多様な観点から横溝テキストの〈戦後性〉は析

出可能であると思われるが、本稿の切り口は先述したように「論理」の問題である。「探偵小説」が「論理的」であるとは、いかなる状態を意味するのだろうか。そして、そのことが「戦後」という状況下に要請されたはいかなる理由によるのだろうか。本稿はこれらの問いをめぐつて展開していく。

二 「論理」の論理

そもそも、「本陣殺人事件」というテキストにおいて、「論理的」であることとはどのような表象をされているのか、確認しておく。

「足跡の搜索や、指紋の検出は、警察の方にやって貰います。自分はそれから得た結果を、論理的に分類総合していつて、最後に推断を下すのです。これが私の探偵方法であります。」
それを読んで銀造は、いつかかれが巻き尺や天眼鏡のかわりに、これを使いますといつて、頭を叩いてみせたことを思い出して、思わず快心の微笑をもらしたのであつた。

(傍線部引用者、以下同)

引用箇所は、探偵役である金田一耕介が自らの「探偵方法」を記述した場面であるが、それはすなわち、金田一の語るこの「探偵方法」には前提と欠如が同時に存在していることを示すだろう。具体的に記述に沿つて確認しよう。金田一は「足跡の搜索や、指紋の検出は、警察の方にやって貰います」と語る。そのことは

彼の「探偵方法」には根源的原因としての「足跡」や「指紋」といった多大な影響力を持つと考えられているものが先行しており、そしてそれは彼の「方法」の外部にあるという状況を導く。つまり、それは現前であると同時に不在なのだ。そして、今ここにある意味を保証し、外部から正当化を行う原理「結果」を「分類総合」し「最後に推断を下す」ために使用されるのが、「論理」なのだと述べている。したがって、この「探偵方法」は次のような戦略的構造を有しているといえるだろう。「結果」の意味を一度剥奪し、「結果」そのものを現前させることで逆にそれらの断片のつくりあげる「推断」を創造する。そして、それは断片を統合する最終審級としての金田一耕助の「頭」という表象を絶対化し、ひとつの閉鎖的な共同体を生み出すことになるのだ。つまりこの場面での「論理的」という言葉が意味するのは、超越的な知の源泉となる諸概念「警察」という公的機関を前提とし、あたかも〈感情〉を排除し、数理的／科学的「客観」として事象を認識する枠組みを装いながら、その内実は探偵が自らを中心化し、そこに統一性と同一性を付与し、同時にその代償として常に存在するはずのあらゆるレベルの差異の可能性を否定することであると定義できる。では、そのような「探偵方法」は、テクスト上ではどのように使用されているだろうか。該当箇所を次に確認してみよう。

警部は手触りで、それがなんであるかも覚ったのにちがいない。はっとしたように息を吸うと、ふるえる指でハンケチを解き、麻紐を切り、油紙をひらいたが、すると中から出て

来たのは、なんと手頭から切断された男の右手であった。その手には三本しか指がなかった。拇指と人差指と中指と。……「警部さん、これがあの血の指紋を捺すために使われたスタンプですよ」

新婚初夜に「柳家」の離れて死亡した賢蔵と克子夫妻。そして、離家には血のついた指紋が残されていた。そして、その指の痕跡が三本分しか発見されず、その後に、三本指の切断された「右手」が発見されたとき、それは「血の指紋を捺すために使われたスタンプ」という金田一耕助の認識を媒介とし、「血の指紋」と「右手」は直結される。よく知られているように「血」と「指紋」はともに個人を管理し同時に同一性を象徴するような特権的表象であるが、重要なのは、この発見された「右手」と残された「指紋」の同一性を保証するのは、テクスト上には金田一耕助の言説しか存在しないことである。確かに「三本指の男」の「指紋」は警察によって採取されている。そして、「男」の「右手」は切断されており、また切断された「三本指」の「右手」もテクスト上には存在している。だが、これらの同一性を保証するはずの根拠は、以上のような状況証拠以外には記述されていない。しかし、金田一の言説は、一足飛びにこれらの同一性を保証し、物語はそのことを前提に進行してゆく。つまり、「本陣殺人事件」の金田一耕助における「探偵法」の「論理」とは、本来は事象に先行するはずの〈原因〉を後から作り上げるといった転倒した形式なのである。そのことを象徴的に示しているのは、次の一文である。

金田一耕助があゝ素晴らしい実験によつて、一挙にこの変
態な密室殺人事件を解決して見せたのは、その晩のことであ
る。

引用箇所は、一柳家の離家の密室状態を説明するため、琴の糸
と水車を利用し柵干から凶器の日本刀を屋外に移動させた原理を
再現した場面であるが、ここには「密室殺人」に「解決」をもた
らすものとしての「実験」という枠組みが提示されている。そし
て、ここで「実験」という言葉が選択されていることは注目に値
する。何故ならば、ここで使用された「実験」の一語とは、語義
的には出来事への遡行へのプロセスを実証的に経験し、同時にそ
の絶対性を保証する言葉として把握される言葉だからだ。つまり、
この金田一の「素晴らしい実験」とは、一回的な起源的外傷とし
ての「密室殺人」を絶対的なものに固定する作業であると措定で
きる。だが、すべての「実験」がそうであるように、本質的にこ
こには欺瞞が存在する。つまり、あらゆる一回的な出来事はまた、
その一回性を脅かす複数の可能性につねに曝されているからだ。
そのため、ここでの金田一の言説もまた、一回性を捉える事後的
構造を無視し、「密室殺人」をかつて、確実にあつたものとしてテ
クストの表層に実体化したものだとして理解できるだろう。

「本陣殺人事件」とは、「論理的」に書かれたテクストである
と評価されている。しかし、その「論理」と名指された概念の内
実は、実は探偵である「金田一耕助」がメタレベルで特権化さ
れ、物語の構造を設計する隠された語り手として機能しているこ
とを意味している。そのことは、事件の「動機」もまた、他なら

ぬ金田一耕助によつて〈設計〉されていることが示される、次の
場面でも論証できる。

「それなんだよ、金田一君、賢蔵氏はなぜまたそんなことを
したのだ。結婚式の晩に花嫁を殺して自殺する。それはよく
よくのことですよ。賢蔵氏はなぜそんな事をしたんです」

「警部さん、その事ならあなたもご存じの筈じゃありません
か。今朝白木静子という婦人が語ってくれた事実、つまり克
子さんが処女でなかったという秘密、それが今度の事件の直
接の原因なんですよ」

警部は大きく眼を瞠つて、噛みつきそうな顔をして金田一
君を睨んでいた。

事件の動機は、金田一が語るように、潔癖症の賢蔵が婚前交渉
を持った克子を許すことができず、しかしまた婚約破棄とする不
名誉を受け入れることもできなかったためであつたが、注目すべ
きは金田一が隠された語り手の言説は、このことを「白木静子と
いう婦人が語ってくれた」としていることである。だが、テクス
トを詳細に見てゆけばわかるが、白木静子はこのようなことを
まったく語っていない。「克子さんが処女でなかったという秘密」
が明らかにされるのは、静子に送られた克子自身の手による次の
ような「手紙」の記述なのである。

お懐かしき静子姉さま

(中略) むろんこの事は、——克子の処女でなかったとい

うことは、一柳の心に暗いかげを投げたにちがいません。でもわたし、ああいう秘密を抱いて、終始うしろめたい気持ちでいるよりは、この方が幸福な結婚生活に入れるのではないかと思っています。あの人の心にどういふ影を投げたにしろ、克子、自分の努力と愛情で、きつと、それを吸いとって見せようと思っています。

また、この克子の「手紙」を經由してもなお、金田一の語る「直接の原因」には距離がある。そのことは具体的に金田一の次の台詞にも確認できる。それは、ある意味では「本陣殺人事件」における「論理」の限界を示す言葉であり、同時に「探偵」は隠された語り手たりえるが、全知の「神」たりえないことを示す言葉でもある。

「さあ、それですよ。この事件では事件の計画者はすでに死んでいるのですから、告白をさくというわけにはいきません。だからわれわれが想像していくよりほかに手はないのですが、ここには幸い関係者の顔触れもだいたい揃っていますから、はじめからこの事件を研究していつてみようじゃありませんか」

ここで提示されているのは、まさしく金田一「探偵」に隠れた語り手の位相である。事件の計画者の内面を「想像」し「研究」することで、事件を「設計」し、ありえたかもしれない可能性を測定すること。具体的には〈性交渉〉の有無という〈物質的〉要

因としての「事件の直接の原因」を措定し、そこに克子の「努力」や「愛情」という〈感情〉の失敗、あるいは死亡という当事者の不在（人間）の内面性の棄却を付与することで「物語」を構築すること。そのことが「論理」の名のもとに行われるのが、「本陣殺人事件」というテクストのもつ基本構造なのである。そして、その「物語」では、同時に人間の内面は極めて単純化されている。賢蔵の次のような造形には、そのことを端的に確認できるだろう。

これはほんの一例なんですが、このお宅へ客が来て火鉢を出す、その火鉢に少しでも客の手がふれる。すると賢蔵さんは後でその部分をアルコールで消毒しなければ気がすまなかったそうです。こうなると潔癖というよりも、病的としか思えません。つまり賢蔵さんという人には、自分以外の人間はすべて穢らしくて不潔に思えて仕方がなかったのです。

賢蔵は極端な潔癖症で、自分以外の人間はすべて穢らしくて不潔に思えて仕方がなかったのだと、金田一は語る。ここでの「不潔」とは他者を〈物質〉的に「穢らわし」と認識することであり、この認識のもとに「アルコール消毒」という〈物質〉的の消去と、婚前交渉を持った妻の殺害の相同性が「論理的」に保証されている。このような、〈物質〉に〈人間〉性を仮託する感性を「論理」で超克する試みとして「本陣殺人事件」を読解することに関しては、笠井潔の次の指摘が参考になる。

『本陣殺人事件』の作中には、初期クイーン作品にも匹敵す

るような多彩なモノが溢れている。殺人現場で発見されたコップ、日本刀、鞘、三箇の琴爪、琴柱、鎌、等々。日本刀や琴の関係品などには、オリエンタルな日本趣味が誇張的なまでに刻まれている。だが、作者は既に、それらに冷静な距離を置いているのだ。日本刀や琴など過剰な意味を吸引するだろうガジェットは、かつてのような思い入れの対象であるというよりも、それを脱色された無機的なモノに還元されている。『本陣殺人事件』の成功の秘密は、最初に伝統文化的な象徴効果を帯びて登場する諸々のモノを、最後に探偵の推理において、無機的なモノに断固として還元してしまう異化効果にあるといふべきだろう。

あるいは、次のように逆説的に「本陣殺人事件」における「論理」の意味を把握することもできよう。いかなる「論理」もなく人が殺されること。真に恐ろしいのはこの偶然性、確率的性質ではないだろうか。つまり、殺された人は、殺されなかったかもしれないことこそが、悲劇なのだ。と。「論理」を使用する（喪の作業）は、「探偵」を絶対化することでその恐ろしさを回避する。そして、そこにこそ「探偵小説」という形式の意味を測定する可能性が導き出されるのである。

三 「探偵小説」への自己言及

本稿冒頭で言及した乱歩による「本陣殺人事件」の評価であるが、乱歩はそこで同時に、「本陣殺人事件」へのいくつかの「不

満」を述べている。その最大の不満は次のような内容である。

さて、段々大きい不満に及ぶのであるが、次に主人公の弟が予行練習を見て兄の脅迫に会い、進んで兄の殺人と自殺を補助するに至る心理が甚だ不可解である。弟が如何に変質者で倫理的不感症に陥っているとしても、単なる殺人補助なれば兎も角、実の兄の自殺を面白半分助けるといふ心理は、余程の説明がなくては理解できない。彼が保険金ほしさにこの好機を利用して兄を見殺しにするほどの悪党であったとすれば、不自然はなくなるけれども、この小説では弟の性格は決してそういう風に描かれていない。彼の動機の最も大きなものは探偵小説マニアの遊戯に過ぎなかった。

これは単なる変質者とのみでは納得出来ない心理である。小説はあらゆる可能性を追求して差支ない。しかしながら、作者はそれが可能であるが如くに表現する義務を負わされていることを忘れてはならない。

「本陣殺人事件」への乱歩の「不満」は、要約してしまえば「三郎」の「心理」の「不可解」さにあるといえる。「三郎」の「心理」描写の欠如は「探偵小説マニア」という「論理」の（遊戯）のパーツとしての「三郎」像を形成してしまっていると乱歩は指摘している。ここに、不明瞭な人間性の隠された意図（人問らしさ）を重視する乱歩と明快な「論理」に焦点化して描く横溝という二項対立を描くことは容易いが、そのように単純化してしまうと見えなくなる位相こそが、本稿が可視化すべき位相であ

る。その位相とは、「本陣殺人事件」というテクストの特徴的側面、つまり「探偵小説」への自己言及的視線と関わっている。そのことを論証するために、乱歩が批判した「三郎」の表象を再度検証してみよう。

三本指の男の持っていた写真から、あのアルバムのトリックや、それからひいては日記の細工を思いついたのは、みな三郎であった。また、死人の首を斬り落としておいて、その指紋を利用しようと考えたのもかれだった。但し、三本指の男を犯人に仕立てようという考えは、賢蔵も持っていたであろう。しかし、賢蔵にはそれをどうすればよいか、よく分からなかった。かれはただ、三本指の男の死体を、人知れずかくしてしまったら、そいつに疑いがかかりはしないか……と、それぐらいの智慧しかうかばなかった。そこを三郎が修飾し、補筆して、まんまとあの大芝居に完成したのである。

(中略)

要するに三郎という男は、性格破産者だったにちがいない。死という厳粛な事実でさえも、かれにとつては一種の遊戯だったにちがいない。

引用箇所は、乱歩の批判の大部分に該当する記述である。「死という厳粛な事実」を「遊戯」、つまり操作可能な対象とするところこそが、乱歩の感じた「不自然」さの源であると思われる。むしろここには、「三郎」が「性格破産者」であるという(人間)を(物質)に還元する(非人間)性の寓意、つまり「論理」のパ

ーツとして登場人物を配置する「探偵小説」との相同性を喚起する表象も存在しているが、乱歩はそれにも「納得出来ない」としている。だが、ここで注目すべきは「三郎が修飾し、補筆して、まんまとあの大芝居に完成した」という表現だろう。つまり、(人間)的動機の欠如とそれにかわって「論理」を補填すること、「補筆」するものとして「探偵小説」というものが表象されているのだと、この表現は理解することができる。それは「本陣殺人事件」において、「探偵小説」とは「厳粛な事実」を「大芝居」に変換し、「死」を「遊戯」にかえるものとして機能しているということに接続する「論理」なのである。そして、このような「論理」は、三郎による「修飾」、「補筆」に限定されるものではなく、テクスト全体を貫く構図としても把握できる。それは、横溝正史を想起させる語り手である「私」という人物による次のような記述から確認できるだろう。

およそ探偵小説家を以て自負するほどの誰でもが、きつと一度は取り組んでみたくなるのが、この「密室の殺人」事件である。犯人の入るところも、出るところもない筈の部屋の中で行われた殺人事件、それをうまく解決することは、作者にとつてなんとという素晴らしい魅力だろう。だからたいいの探偵小説家がきつと一度はこれを取り扱っているし、畏友井上英三君の説によると、ディクソン・カーの如きはその全作品が「密室の殺人」の変形であるという事だ。私も探偵小説家冥利に、いつかは一度はこのトリックと真つ向から取り組んでみたいと思っていたのだが、なんと今や勞せずして、それ

を自分のものにする幸運に恵まれたのだ。してみれば私は、あの恐ろしいな方法で二人の男女を斬り刻んだ凶悪無慚な犯人に対して、絶大な感謝を捧げなければならないのかもしれない。

「探偵小説家」である「私」は「密室の殺人」への「素晴らしき魅力」と「感謝」を感じ、そしてそれに出会えたことを「幸運」であると述べている。そして、そのような「私」にとって「本陣殺人事件」とは次のようなものであるとも認識されている。

この鴨居も梁も雨戸も紅殻で塗り潰してある事は、この物語のいちばんはじめに、言っておいた通りである。

「私」にとって、一柳家でおこった出来事は「物語」であると把握されている。ここに、「事件」を「物語」として語る「私」と「修飾し、補筆」する「三郎」の關係の二重構造をみることでできるだろう。つまり、「私」と「三郎」はともに、「死という厳肅な事実」への「遊戯」的な関わり方において相同性を反復しているのである。そして、そこにおいて、欠落するのは「殺人がおこらなかった可能性」なのだ。「死という厳肅な事実」という認識は、「死」ななかった可能性と表裏一体の關係にある。だが、それを「遊戯」にするということは、多様な可能性を抹消し、唯一の形式的なゲームとして「物語」を構築することを意味する。そのことは、つまり、先に述べたように、「論理」が用いられるのは、その擬似的な絶対性により、「死」ななかった可能性がも

たらす悲劇を回避することなのである。「本陣殺人事件」の持つ「物語」の構造とは、このように理解することができるだろう。

本稿は、冒頭で二つの問を設定していた。一つ目の問、「探偵小説」が「論理的」であるとは、いかなる状態を意味するのだろうかという問題には、以上のような回答を与えることが出来る。

では、二つ目の問、そして、そのことが「戦後」という状況下に要請されたのはいかなる理由によるのだろうか、という問題に関して、次項で検証を加えよう。

四 「家柄」という〈因習〉とその抹消

「本陣殺人事件」はその冒頭付近に、次のような印象的な記述がなされている。

農村へ入って見給え、都会ではほとんど死滅語となつてゐる「家柄」という言葉が、いかにいまなお生き生きと生きてゐるか、そしてそれがいかに万事を支配しているかを諸君は知られるだろう。今度の敗戦依頼の社会の混乱から、さすがに農民諸君も地位や身分や財産などには、以前ほど叩頭しなくなつた。それらは今、大きな音を立てて崩壊しつつあるからである。しかし家柄は崩壊しない。よい家柄に対する憧憬、敬慕、自負は今もお農民を支配している。しかも彼らのいうよい家柄とは、必ずしも優生学や遺伝学的見地から見た、よい血統を意味するのではないらしい。旧幕時代、代々名主を勤めたとか、庄屋であつたとかいえば、たといその家から発疾者

や癲癩病者や狂人が続出しても、よい家柄で通るのである。現在の革新時代においてすらそれだから、昭和十二年頃の、しかも本陣の家筋であることを、何よりの誇りとしている一柳家の一族が、いかに家柄の尊厳を重視したか、多くいうを要すまい。

ここには、一つの視座が提示されている。それは、「優生学」、「遺伝学」という科学を相対化する「農村」における上部構造としての「家柄」の存在である。そして、「家柄」とは「今度の敗戦依頼の社会の混乱」を抱えるテキスト内の現在においても存続している。また、引用冒頭に「農村へ入って見給え、都会ではほとんど死滅語」云々と「農村」を「都会」の〈外部〉と規定し、「封建制」にもとづく共同体としてとらえる視点もこの箇所から確認できるだろう。そして、「家柄」を「何よりの誇りとしている一柳家の一族」という構図の提示が提示されていることも、この箇所から確認できる。このような〈因習〉を前提して、「本陣殺人事件」というテキストは記述されているのだが、この〈因習〉によって生じた「矛盾」こそが、「事件」を勃発させる「論理」として機能していることは注目に値するだろう。金田一は賢蔵の「人格」を次のように説明している。

それから、そういう正義感の強い人だけに、こういう農村の大地主という地位に対して常に疑問を抱いていられた。封建的色彩の強い思想や習慣に対しても、はげしい憎悪を持っていられた。ところが不思議なことにそういうふうには嫌悪して

いながら、では、この一柳家で誰が一番封建的だったかといえれば、実は賢蔵さんご自身だったのです。一柳家の長男であるという権威、本陣の末裔であり大地主であるところから来る暴君性、それを非常に多分に持つていられて、他人がその尊厳を冒すと強い不愉快を感じられた。つまり賢蔵さんという人は、そういう矛盾にみちた人格だったのです。

賢蔵の「矛盾」する「人格」は、「家柄」という〈因習〉への「憎悪」と「尊厳」の両極に引き裂かれたことによって造形されている。つまり、賢蔵というキャラクターには〈近代〉と〈前近代〉の両要素が同時に設定されているといえるだろう。そのため、賢蔵は「殺人」を犯すという「論理」が次のように成立するのである。

つまり、ふつうの人間にとつて不自然に見えるこの動機も、賢蔵氏の性格と、本陣の末裔というこの家の雰囲気から見れば、少しも不自然ではない。いや、むしろ避くべからざる動機となったのですよ。で、結局、ああいう方法をとるよりはかに仕様がなかった。

そして、そのような賢蔵のキャラクターを理由とした事件は、「殺人」であると次のように表象される。それは、先に確認した「探偵小説」の形式をとることで回避されるような種類の「悲劇」ではなく、「論理」が要請する「殺人」なのである。だが、テキストには一箇所、「悲劇」という言葉もまた同時に確認でき

る。具体的な記述を確認しよう。

「心中……？ いやおそらくそうじゃないと思います。これは悪意と憎しみにみちた、ふつうの殺人事件なんです。自殺が目的じゃないのですからね。自分をこういう、のっぴきならぬ立場におとし入れた克子さんに対するはげしい憎しみ。

——それが昂じて、克子さん殺しの計画に成長していったんです。（中略）つまりこれはふつうの殺人事件や探偵小説と、順序が少し逆になっているだけのことなんです。（中略）だから、犯人が自殺したからって、この事件を軽く見るのは間違っていると思う。犯人はあくまで克子さん殺しを自分のせいでないように見せかけているのですし、更に自分の自殺でさえも、自殺でないように見せかけているのですから、悪辣といえはいつそう悪辣ということが出来ると思う」

「自殺と思われなくなかったのは、やはり親戚に兜をぬぎたくない。それ、見たことかと、親戚や良介さんにも啞われたくないという考えからなんです」

「そうです。そうです。この事件の謎はそこから出発しているんです。つまり本陣の悲劇なんです」

「本陣の悲劇」とは「憎悪」としての「殺人」と「尊厳」としての「自殺」という両側面を表す表象として捉えられる。その両側面は次のように構造化できる。〈近代〉的／〈論理〉的なものが表象するものが「殺人」である。そこでは、〈人間〉が〈物質〉に還元されてしまう「論理的」な世界観に基づき、伝統的な

意味の体系から引き離される「個人」としての賢蔵の存在が指定されている。つまりこの場合、経験的な価値感に従って死生観は決定されることになり、賢蔵の行為は「殺人」として金田一に理解されている。他方で、当然そこに〈前近代〉的／「封建」的な「自殺」を賢蔵に見出す可能性も存在するだろう。そこには、金田一が抑圧して語らない〈内面〉を備えた自己完結的な〈主体〉の存在があり、そこでの〈生〉の意味が共同体によって与えられ、「個人」の〈生〉と〈死〉が超越的な価値感によって支えられる世界観があるのだ。従って、不意に金田一の洩らした「本陣の悲劇」という言葉は対立的な二項が同時に内面化されている存在としての「賢蔵」の造形を承認する、金田一の認識の発露として把握できる。

だが、結果的に金田一の「論理」のもたらすものは、「賢蔵」の持つ両面性を抑圧し、「殺人」という伝統的な意味の体系から引き離される「個人」としての賢蔵の存在の指定に結実している。そこでは、「悲劇」が抹消され、〈近代〉的／〈論理〉的な存在としての「賢蔵」像が拡大されている。そして、このような〈近代〉性を強調するような語りは、実はテキストの持つ〈戦後性〉と密接に関係している。最後に本稿はそのことを指摘しておきたい。

五 〈語り〉の構造と〈戦後性〉

「本陣殺人事件」の時間軸を特定するには、次の記述がその傍証になるだろう。

それは昭和十二年十一月二十三日の夕刻、即ち事件の起った日の前々日のことだった。

ここで、「昭和十二年十一月二十三日」、つまり一九三七年という語られる時制があり、「事件」そのものは戦中に起きていることが明らかにある。他方で、語りの現在から事後的に「一柳家」のその後を語る次の引用から、ある程度「現在」の時制も特定できる。

三郎はもちろん起訴されたが、まだ判決が下らないうちに、事変がしだいに深刻化して来たので、法廷から応召して、漢口で戦死したということである。可憐な鈴子もその翌年死んだ。この少女は死んだほうが、幸福だったかも知れない。良介は去年広島へ旅行していて、そこで原子爆弾のために死んだということだが、父の終焉の地で、その子が同じ戦争のために命をおとすというのも、何かの因縁でしょうと、村の故老はいっている。

引用したように「広島」への「原子爆弾」の翌年つまり一九四六年という語る現在の時制があり、「戦後」から「戦前」を語る「私」という回顧的な（語り）の構造をテキストは有していることがわかるだろう。そして、「本陣殺人事件」という「物語」は実は、〈伝聞〉の形式で語られている。

私ははじめてこの話の片鱗をきいたときから、非常に興味を覚えたのだが、やがて、この事件にもっとも精通しているF君から、事の真相を聞くに及んで、なんともいえぬ大きな昂奮にとらえられたものである。それはふつうの殺傷事件とはまるで違っており、そこには犯人の綿密な計画があり、しかもなんとこれは、「密室の殺人」に相当するものであった。

テキストの「事件」部分、つまり一九三七年の出来事は〈伝聞〉で構築された「この話」であり、テキストは「F君」の経験的な価値観に基づく「物語」として構成され、さらに、「私」の「昂奮」を通過し、再構成されている。つまり、「本陣殺人事件」というテキスト全体の構造としては、時制的には語られていないことの空白を後から再構成する「私」の企図によって物語られるということになる。その意味では、「探偵」の「論理」と「私」の書くこととはともにメタレベルから「物語」を操作するという同質性を帯びている。その構図で「本陣殺人事件」をとらえたときに、笠井潔の指摘した「探偵小説」の〈戦後性〉に関する指摘は重要だろう。

探偵小説は、ダダイズムなど大戦間のアヴァンギャルド芸術のように、人間概念の破壊を正面に掲げたものではない。それは既に存在しない「人間」なるものに人工的な二重の光輪をもたらすことにおいて、瞬間的で虚構的な、しかも劇的な復活を巧妙に演出するのだ。だが、そのようにして復活させられた「人間」は、探偵小説形式に適合的な、抽象化されたパズルの

項でしかない¹⁰。

一般的に近代以前において、人々の〈生〉の意味は共同体によつて保証されていた。そして、それは近代的な国民国家のシステムに引き継がれるが、「戦争」という〈国民〉の無意味かつ大量の〈死〉によつて「国民国家」という〈物語〉は失効し、「国民国家」という政治的想像力の及ばない無名の、そして大量の〈死〉が発生してしまう事態に陥る状況が発生する。それに対し、「探偵小説」とは、そのようにして失われた〈死〉に再度、意味を与えることで〈人間〉性を再構築するという苦肉の策として把握できるのだという。その意味では、「探偵小説」とは徹底的に「論理」のコードに閉じこもつた、貧しい文学であるともいえる。だが、その貧しさとは、まさしく〈戦後〉という状況下の意味の涸渇の反映でもあるだろう。「本陣殺人事件」の作中現時と同年、丸山真男が記述した次の一文は、その状況を端的に示している。

八・一五の日（終戦記念日——栗田注）超国家主義の全体系の基盤たる国体がその絶対性を喪失し今や始めて自由な主体となつた日本国民にその運命を委ねた日でもあつた¹¹

テクストの末尾には、「一柳家」の「現在」が次のように記述されている。

さて、この稿を閉ずるにあたって、私はもう一度、あの一

柳家を見にいった、

私がこのまえ見にいったときは、まだ早春の肌寒いころで、田圃の畦には、まだつくしの頭ものぞいていなかったのに、いまはもう、見渡すかぎり、黄金の波打つ、みのり豊かな秋である。私はまた、こわれた水車のそばを通過して一柳家の北をくぎっている崖にはいあがり、藪のなかにわけいった。そして南を向いて一柳家を見ると、今度の財産税と農地改革とで、さしもの一柳家も、没落の運命を避けることは出来ないであろうということである、それからぬか、本陣の面影をそのままにうつしたといわれる、あの大きな、どつしりとした母屋の建物も、頹廢のかげが濃いように思われてならなかった。

ここに描かれている「一柳家」の「没落」の「運命」が意味するのは〈前近代〉的／「封建」的認識や価値観の相対化された〈戦後〉という状況下なのであり、「終戦」と「没落」の相同性には「国民国家」と「家柄」という帰属の失効、つまり神話や運命の喪失が重ねられている。そしてそのような、〈人間〉の失効と再構築の装置としての「探偵小説」を志向する「私」の語りを通じて、「本陣殺人事件」という「論理」に支配された「事件」は構築されてゆくのである。だが、そこでは、人間と世界のあいだにいかなる本質的な意味的繋がりも見いだせず、ただただ人々の無意味が逆説的に強調されることにもなるだろう。ここでは「論理」の名の基に多くの要素が人間の〈死〉に意味を付与しようとしてくる。しかし、ただひとつ、そこには人間の〈生〉の意

味が描かれることはないのだから。

注

東京創元社

(11) 丸山真男「超国家主義の論理と心理」〔世界〕一九四六年五月)

(くりたすぐる 大学院後期課程在學生)

(1) 江戸川乱歩「本陣殺人事件」を評す〔宝石〕一九四七年二月・三月合併号)

(2) 横溝正史「あとがき」〔本陣殺人事件〕一九四七年二月、青珠社)

(3) 小松史生子「戦後文学としての本格推理——横溝正史『本陣殺人事件』再考」(吉田司雄編『探偵小説と日本近代』所収、二〇〇四年三月、青弓社)

(4) 権田萬治『日本探偵作家論』(一九七五年二月、幻影城)

(5) 五味測典嗣「横溝正史と戦後啓蒙——『獄門島』試論——」〔大妻国文〕二〇一〇年三月)

(6) 倉田容子「鏡像としての村落——横溝正史『八つ墓村』——」〔昭和文学研究〕二〇一一年九月、同「横溝正史『悪魔の手毬唄』における農村表象の批評性」〔日本文学〕二〇一二年二月)

(7) 「血」と「指紋」をめぐる言説に関しては、井上貴翔「『徴』としての指紋——小酒井不木「赦罪」を中心に」〔北海道大学大学院文学研究科研究論集〕二〇〇八年)に詳しい。

(8) 笠井潔『探偵小説論Ⅰ 氾濫の形式』(一九九八年二月、東京創元社)

(9) (1) に同じ

(10) 笠井潔『探偵小説論Ⅱ 虚空の螺旋』(一九九八年二月、